認知症高齢者グループホームにおける入居者の過ごし方からみた 「生活の質」の評価

－民家改修型の空間特性による過ごし方の展開－

AN EVALUATION OF THE QOL ON THE GROUP LIVING FOR THE PEOPLE WITH DEMENTIA THROUGH THE RESIDENT'S DAILY LIFE

－The effect on the resident's daily life with the renewal type of group living's spacial composition－

黒木 宏一*, 横山 俊祐**

Hirokazu KUROGI and Shunsuke YOKOYAMA

The purpose of this paper is to find the knowledge for creating group living's environments for resident's daily life. To find the knowledge, we evaluate the QOL on the group living and analyze the primary factors to create well quality life. Especially, addressing renewal type which reuse a house for group living, we find alternative knowledge. Renewal type has some spatial characteristics which are places of various character, open private room, corridors opened to the outside and private room, connected room, tatami which enable to sit floor. These spatial elements are primary factors in improvement of the autonomous life and enhancement of QOL.

Keywords: group living for the people with dementia, renewal type, newry-built type, quality of life, autonomous life

認知症高齢者グループホーム、民家改修型、新築型、生活の質、自律的な生活

1. はじめに

1-1. 研究の背景・目的

認知症高齢者向けグループホーム（以下、GH）は、これまで、認知症高齢者のための居住・介護の場として大きな役割を果たしてきた。2006年4月に施行された介護保険では、「介護予防」・「在宅サービスの充実」が掲げられ、GHはこれまでの居宅サービスから地域密着型サービスへと位置付けが変わり、小規模多機能施設との併設により、一層明確に「居住」の機能を担うという展開が予想される。

特に、生活集団や空間の小規模性を前提にして日常性を重視するといったGHの特質は、「自宅でない在宅」¹⁾と位置づけられており、大規模な特別養護老人ホーム等において生活環境を住宅に近づけるユニットケア・空間づくりに影響を与えるなど、入居者が一律にケアを受けるための「施設」から脱却し、主体的に住まう「生活の場」としての環境づくりを先導することが期待されている。

GHには居住の安全性や利便性だけでなく、介護負担の軽減に加え、入居者にとって馴染みのある環境の提供・地域との融合等が求められる。それらを踏まえつつ、GHの建築形態には、建物を新築する新築型に加え、既存の建物を改修して活用する改修型も数多く存在している。特に民家を利用した「民家改修型（以下、改修型）」は、「住まい」を原形としており、住宅独自の空間構成やスケール感、設え

を保持する傾向にある。「生活の場」を実現するための様々な手掛かりが潜在・顕在していると考えられる。

本研究は、住宅改修型の空間特性と入居者の過ごし方との関係を新築型と比較しつつ明らかにした上で、「生活の質」²⁾という視点で評価し、GHの環境を「生活の場」として充実させるための計画的な知見を得ることを目的とする。本研究で指定する「生活の質」とは、入居者の生活における主体性、個性、多様性をいう。具体的には、①一緒に過ごす相手を自由に選び取る②入居者自らが主体的・個別的に生活行為を実践する③生活行為や心身状況に応じて空間を自らの意志で選択する「自律した生活」の展開のことである。

GHに関する既往研究には、石井らの、萌芽期の新築事例を対象に、空間利用・人間関係形成の特性に関する研究³⁾や、先進事例を対象に、共用空間の使われ方を通じて生活の個別化の要因をみた研究⁴⁾、蔽らによる入居者の空間への馴染みを解明した研究⁵⁾、鈴木らによる空間と入居者の生活やケアとの関係をみた研究⁶⁾等がある。石井の研究⁴⁾では、多様な空間が個別の生活展開に繋がること、蔽らの研究⁵⁾では、認知症の程度に合わせて空間を選択することが環境へのなじみを促すなど、多様な共用空間の計画の重要性を指摘している。民家や旅館等の改修事例に着目した蔽ら⁷⁾は、入居者とスタッフの関わり⁸⁾に居間や食堂と台所の空間構成が影響するとしている。山田ら⁹⁾は、

* 大阪市立大学大学院工学研究科 後期博士課程・修士(工学)

** 大阪市立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

Doctor Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City Univ., Dr. Eng.

民家活用を通じて、入居者の居場所の選択に、空間の設え・入居者の生活背景や心身状況・対人関係が作用するとしている。これらの研究はGHを「生活の場」として計画する課題に応じている。

本研究は、GHの環境を「生活の場」に近づけるための計画的示唆を得ようとする点では既往研究と方向性を同じくするものの、改修型がもつ住宅独自の空間に着目することで、新築型を対象にした研究では得にくいGH計画の知見を見出すことに主眼をおく。

1-2. 調査概要

1) 事例の選定と空間特性

事例選定のために、九州・山口のGHを対象とした調査を行い¹⁰⁾、新築型・改修型（民家に限定しない改修）の空間特性・運営方法などの基礎データを収集した。結果の概要は以下の通りである。

①定員数：新築型では9名が9割を占めるが、改修型では6名が4割、次いで9名・8名・5名がそれぞれ2割とばらつきが見られる。

②面積規模：新築型では、200～400㎡が9割を占めるが、改修型

では200㎡以下が6割と小規模なものが多い。しかしながら入居者1人あたりの面積は、新築型・改修型ともに30㎡前後と違いが見られない。居間・食堂の面積は、改修型では6畳・8畳（12～15㎡）～22㎡と小規模である。一方、新築型では改修型に近いスケールを有するものもみられるが、40㎡前後と規模の大きいものが多い。

③共用空間の構成：居間や食堂が一体的につくられている「一体型」と、両者が別室の「分離型」にわけられる。新築型では一体型が7割以上と大半を占める。また、分離型の殆どが食堂と連続して建具で仕切られる和室（居間）をもつ。改修型では一体型4割、分離型6割と、ほぼ同じ割合で見られる。縁側や居室などのその他の共用空間は、改修型に多くみられる。

④個室：改修型では、住宅の様々な部屋が活用されるために、面積・床仕上げ・建具等が多様である。新築型では、それらが一律で画一的な個室になる傾向がある。また、改修型では部屋同士や廊下との間が建具で仕切られるなど、開放的な個室の事例も多いが、新築型

表1. 事例概要

	新築型			改修型						凡例
GH名	N1	N2	N3	R1	R2	R3	R4	R5	R6	
所在地	鹿児島県	熊本県	熊本県	宮崎県	鹿児島県	熊本県	熊本県	熊本県	山口県	
運営母体	医療法人	社会福祉法人	医療法人	医療法人	有限会社	特定医療法人	有限会社	医療法人	社会福祉法人	
開設年度	H10.4	H12.2	H12.7	H11.5	H12.10	H10.6	H13.1	H12.6	H11.7	
入居者数(定員)	8(9)名	9(9)名	8(8)名	8(8)名	7(8)名	6(6)名	9(9)名	6(6)名	6(6)名	
介護度	8 0 0	4 3 2	7 1 0	5 2 1	3 4 0	3 3 0	7 2 0	5 1 0	4 2 0	□ 要介護度 1~2
備考	—	—	—	—	—	—	ダイバース併設	—	—	■ 要介護度 3~4
延床面積	217.1㎡	299.5㎡	247.4㎡	199.6㎡	203.0㎡	132.8㎡	320.0㎡	155.1㎡	193.7㎡	■ 要介護度 5
延床面積/定員	24.1㎡	33.3㎡	30.9㎡	25㎡	25.4㎡	22.1㎡	35.6㎡	25.9㎡	32.3㎡	
居間	—	—	—	—	—	—	13.2㎡	12.1㎡	9.0㎡	
食堂	19.9㎡	47.4㎡	48.7㎡	22.3㎡	14.9㎡	22.5㎡	16.56㎡	11.0㎡	8.1㎡	
その他	—	テラス1:10.0㎡ テラス2:8.87㎡	—	テラス:5.87㎡	—	広縁:6.1㎡	広縁:12.1㎡ テラス:16.2㎡	—	—	※数字は人数を示す

図1. 対象GHプラン・介護方針

※平面図縮尺 1/600 破線部は増築箇所・灰色部は畳の設えを示す。

では閉鎖的につくられがちである。

⑤廊下：新築型では中廊下が多いが、居間・食堂との間に壁や建具が少なく連続性が高い。改修型では、縁側などの開放的な廊下に特徴がある。居間・食堂とは、建具によって仕切られている。

以上のように、新築型と改修型という建築形態の違いのうち、空間構成や面積規模、建具などの建築要素、床仕上に顕著な差異が伺われる。そこで本研究では、改修型の空間的な特性と過ごし方との関係の特徴を明らかにし、新築・改修 GH の計画的な課題や知見を得るために、改修型の典型（多くを占めるタイプ）である一体型と分離型、新築型の典型である一体型を対象として選定する。3つのタイプの相互比較により、一体型・分離型という空間構成の差異や新築型・改修型に固有の居室の接続性や動線空間、建築要素、床仕上げなどの差異と過ごし方との関係を分析する。

そこで、アンケート調査で得られた新築型（37件）に予め熊本県下で把握していた新築型（9件）を加えた46件の新築型プランから、入居者数や面積規模が同等の一体型を3事例選定した。改修型は、改修の程度が異なるもの、和室や縁側の有無等を考慮しつつ一体型・分離型を各々3事例選定した（表1・図1）。

2) 調査方法

調査は、入居者の属性・過ごし方・介護方針等に関する運営者へのヒアリング、入居者の一日の過ごし方を把握する観察調査を定期的に3期に分けて実施した（2002年11~12月、2003年12月、2005

年11~12月）¹⁰⁾。観察調査は特別な行事等のない通常の日を選び、各期間につき一日間、午前9時~午後5時に行った。生活場面（居場所や行為、過ごす相手）は15分おきに、入居者の移動は継続的に、場面が変化した場合はその契機とともに随時シートに記録した。

2. 入居者の過ごし方の特性とその要因

本章では、共用空間の構成の仕方（一体型・分離型）に着目し、過ごし方の特性、要因について考察する。

2-1. 居場所の特性

図2はGH毎に、場所別の滞在時間の割合を、図3は個々の入居者の滞在場所を表したものである。各GHともに概ね居間・食堂、個室が居場所になりやすいが（図2）、各入居者が過ごす時間帯には差異がある。N3・R1では、大半の入居者が居間・食堂で同様の時間帯に過ごしている。またN1では、食後の1時間位を一齐に個室で過ごす以外は、全員が同じように居間・食堂で過ごしている。これら3事例では時間帯・居場所ともに一様な過ごし方が顕著で、居間・食堂に居場所が集中している。一方、N2やR3では、居場所は個室中心の入居者と居間・食堂中心とに分かれるものの、テラスで日向ぼっこをする（N2）、広縁でお茶を飲みながらお喋りをする（R3）など、居場所の分散化も窺われ、また各々の場所で過ごす時間帯が入居者個々で異なる。R2・R4~6では、お茶、昼食時に居間や食堂に集まる以外は、個室や居間、食堂、縁側で思い思いに過ごし、入居者毎

図3. 個人別の空間滞りの様子

に居場所や時間帯、利用頻度が異なる。また分離型では、居間と食堂が各々独立した居場所となることに加え、縁側や個室が共用空間として利用されることで居場所の分散化が見られる(R4~6)。

2-2. 共用空間での滞在人数

共用空間に同時に滞在する人数(図4)は、N1・N3・R1では、入居者の半数以上(5~8人)で一緒に過ごす時間が6~8割を占め、特に居間・食堂に8割以上の人数が集まり、ほぼ全員で過ごす時間が5割前後と高い。また、顔ぶれの入替わりが殆どない(図3)。N2・R3では、半数以上での滞在割合が5割弱を占め、また入居者の入れ替わりが少ない。以上の5施設では、居間・食堂で大勢の、且つ固定的な顔ぶれで一日の大半を過ごしている。一方、R2・R4~6では、一緒に過ごす人数が食堂や居間・食堂で相対的に多いものの、半数以上で過ごす割合は3割強(R2)~0.5割(R6)程度で、全体的に少人数で過ごす傾向にある。また、縁側では少人数、または1人で過ごし、居間、食堂の順に一緒に過ごす人数が多くなるなど、場所によって滞在人数が異なること、一緒に過ごす顔ぶれが入れ替わることによって、入居者同士の多様な居合わせ方が見られる。

2-3. 過ごし方の特性を生み出す要因

1) 共用空間の特性・運営からみる要因：一体型のN1~3、R1~3では入居者の居場所が居間・食堂に集中する傾向にあり、新築型、改修型といった建築形態での違いはみられない。分離型のR4~6では、滞在する場所や時間帯、一緒に過ごす相手が入居者毎に異なり、同じ改修型のR1~3に比べてより個別的である。居間と食堂が分かれていることにより、居場所の選択性が高まり、分散化する。さらに、居間・食堂以外に縁側やテラス、個室などの居場所のあるN2、R2~6では、個室もしくは居間・食堂しかないN1・3、R1に比べると過ごす場所が分散化しており、それぞれの空間での滞在人数もより少人数となる。分離型や居間・食堂以外の共用空間の存在が居場所の多様化を促進し、滞在人数にも影響を与えている。スタッフの働きかけが多いN1・3、R1では、入居者毎の過ごし方が一様になりがちであるが、スタッフの働きかけの少ないN2、R2~6では、入居者毎に異なっており、スタッフの働きかけの程度が過ごし方の個別化に影響している。居場所や滞在人数には建築形態(新築型・改修型)よりも、分離型・一体型や多様な共用空間の有無などの空間構成やスタッフの働きかけが影響している。

2) 居間・食堂の面積規模と過ごし方の関係：居間・食堂における入居者の平均滞在時間と面積との関係を見ると(図5)、20㎡より規模が大きくなるとそれ以上の滞在時間の増加は見られない¹²⁾ものの、居間・食堂の面積が大きくなるにつれ滞在時間も増加する傾向にある。居間、食堂が分かれている分離型は、同じ規模の共用空間を持つ一体型と比べても、滞在時間が短く、共用空間の面積や構成が滞在時間に大きな影響を及ぼしている。

3) 要介護度の違いによる過ごし方への影響：介護度と過ごし方の関係を見ると(図3)、軽度(介護度1~2)の入居者は頻繁に空間を移動するが、中度(介護度3~4)、重度(介護度5)、歩行状態が悪い入居者ほど、同じ場所に長く滞在する傾向にある。しかしながら、多様な居場所のあるR2・R4~6では軽度の入居者の活発な移動が見られるのに対して、居場所が限定されるN1・N3・R1では、軽度の入居者でも移動が少なく、中・重度の入居者と過ごし方が類似している。多様な居場所の存在が、身体能力を発揮する機会に繋がっている。

3. 生活場面からみる「生活の質」の評価

入居者の生活行為、他者との関わり等、生活場面を詳細に読み解くことで、「生活の質」を明らかにし、その評価を行う。「生活の質」を入居者一人ひとりが「主体的」「個別的」に生活を組み立てることと捉え、「過ごす相手(人)」「居場所(モノ)」「行為内容(コト)」を自らの意志で自由に選択している場面、さらにはその結果として入居者個々の生活が「多様」である場面に着目する。同時に、そうした主体性の生成要件を検討するために、①目に見えにくい内発的な契機ではなく、空間や他者による触発などの外発的な契機 ②人・モノ・コトの総体としての場の選択可能性の高さ、即ち「場の多様性」を明らかにし、新築型・改修型の空間特性との関係について考察する。

分析の対象として、新築型3事例(N1・N2・N3)と、改修型では、住宅のもつ独自の空間や建築要素(和室や縁側、障子や襖等)を豊富に有する3事例(R2・R4・R6)を選定した。一日の生活場面の観察記録を入居者毎に経時的に整理した上で、上述の生活の質に関わる場面を抽出して分析を行なった。なお、ここで取り上げた入居者の身体レベルは、車椅子利用者以外はほぼ同等である。

3-1. 活動の契機・展開性(図6)

1) 人の出入りをきっかけとした場面の転換：S-01では、スタッフと入居者がお喋りをして賑やかに過ごしていた場面から、他の入居者が出て行き、絵本を読む④や横になって寝ている⑧とスタッフだけが残り、静かな雰囲気に変化している。その後個室にいた①が和室を訪れ、スタッフとお喋りを始めることで、再び賑やかな雰囲気に転換する。S-02では、和室の炬燵に1人で入っていた⑥に後から訪れた①が話しかけてお喋りを始め、その後①が和室から出て行き、1

図5. 共用空間の規模と滞在時間との相関

人になった⑥がうたた寝を始めている。S-03では食堂を訪れた①に⑤が話しかけた後、一緒にソファと椅子に座り、二人でテレビを見始める。その後調理を終えた③がソファに座りチラシを広げると、隣の①も一緒にチラシを見始め、食堂で過ごす入居者の行為が新たに訪れた入居者との関わりによって変化している。このように、入居者が出入りすることで行為が転換されている。一方、新築型を中心に居間・食堂への出入りの頻度が少ない場合、一つの行為が継続しがちで、転換の契機はスタッフの働きかけによるものが多い。

2) 移動をきっかけとした行為の発生：改修型では、個室から食堂へ向かう途中で広縁のソファに腰掛け外を眺める(S-04)／縁をうろう歩いていた入居者が、和室(個室)で作業をしていたスタッフを見かけて傍に立ち寄り会話する(S-05)／トイレから個室に向かう途中で、縁側に立ち止り掃出窓から庭を眺める(S-06)など、移動の途中で人や眺め、出来事に偶発的に出会うことで新たな行為の発生が見られる。動線上に和室や縁側といった居場所や、そこでの出来事が散在していることで、入居者の主体的な行為が生まれている。新築型では、トイレが居間・食堂に近接して位置し、移動が狭い範囲に留まること、個室が廊下に向けて閉鎖的であること、廊下にソファやベンチ等の家具の設えが乏しいことから、移動を契機とする新たな行為は発生しにくい。

3) 空間の連続性から生まれる行為：個室に洗濯物を片付けに行った際に、個室に連続する和室越しに庭が見え、縁側へ出て庭を眺める(S-07)、廊下をウロウロしていた入居者が個室を抜け、縁側に佇み庭

を眺める(S-08)など、障子の開け放たれた続き間から庭が見えることに触発され、個室を通り抜け、縁側で庭の眺めを楽しむ場面が生まれている。個室同士や個室と廊下・縁側が連続的に、障子や襖によって開放的に繋がっていることで、他所からの刺激を受けやすく、自発的な行為が生まれている。

3-2. 集団や場の雰囲気の高多様性

1) 関わる集団の多様性(図7)：R4の①は、広縁に1人で佇んだ後、他の入居者3人が過ごしている食堂を訪れる(S-09)／和室で⑥と2人きりでお喋りする(S-10)／他の入居者やスタッフが和室に集まり、8人で賑やかに昔の暮らしの話をしをする(S-11)等、様々な大きさの集団や雰囲気と関わっている。様々な共用空間が存在し、入居者の移動頻度が高く、1人・少人数・多人数という多様なサイズの集団が形成されるために、多様な雰囲気や集団の場に関わる機会を得ている。一方で、N1では、居間・食堂に集まって入居者6人で粘土細工を行い(S-12)、昼食前にそのまま同じ顔ぶれでテレビを見る(S-13)、入居者やスタッフ9人が居間・食堂で①の三味線を聞く(S-14)等のように、居間・食堂だけが居場所であるために、多人数の固定的集団で継続的に過ごしており、共用空間の構成が集団の大きさ・多様性に影響を与えている。

2) 場の雰囲気の高選択(図8)：S-15は、同時刻の居間と食堂での入居者の過ごし方である。和室では、入居者とスタッフが集まり、昔の生活を話題にしながらにぎやかな雰囲気の中でお茶の時間を過ごしている。食堂では、和室とは対照的に、⑦が静かに新聞を読みな

図6. 活動の契機・展開性

図7. 関わる集団の多様性

がら過ごしている。「⑦は食堂のざわつきを好まず、個室で過ごすことが多いが、静かな場合は食堂を訪れる」というスタッフの話からも分かるように、食堂に誰にも邪魔されずに過せる静かな雰囲気が生まれていることで、個室以外の場所で過ごす機会を得ている。また、「集団の中に溶け込めず、他者と関わりたいが独りぼっちになる入居者がいる」というスタッフのコメントから判断すると、S-16の⑤は、自分の個室で一人静かに過ごしながらも、個室の襖と食堂の戸の開放性を通して、同時に食堂の賑やかさや人の気配を感じている。居間や食堂が別れていることで、異なる活動や集団のサイズによって様々な雰囲気が生まれること、あるいは自由に開放・閉鎖ができる襖や障子を個室の建具に用いることにより、賑わいや静けさといった場の雰囲気を選び取ったり、両方を享受することが可能になっている。一方で、居間・食堂が一体的な構成のN-3では、大勢で賑やかに過ごすか(S-17)、少人数で静かに過ごすか(S-18)という単一の雰囲気の中での過ごし方に限定される。

3-3. 共用空間の特性が生み出す過ごし方

1) 動線空間における過ごし方の多様性(図9): 縁側では、洗濯物を干す(S-19)／お茶を飲みながら日向ぼっこをする(S-20)／庭に飛んできたメジロをスタッフと一緒に眺める(S-21)／庭を眺める(S-22)

等、外部の気配を楽しむ過ごし方が生まれている。縁側は居室相互を結ぶ動線空間であるが、同じ動線空間であっても中廊下では、移動するのみか、目的なくウロウロ歩く場面(S-23・24)しかない。外部との繋がりが無い中廊下が、移動するだけの空間であるのに対し、掃出窓のある外部との接続性の高い動線空間としての縁側では、眺めや日当たりといった外部からの刺激をうけ、多様な過ごし方が生まれている。

2) 活動内容と居場所の選択(図10・11): R4の⑥は、お茶の時間では、居間で他の入居者やスタッフと共にしゃべりをする。昼食前になると、食堂に移動してソファに座り隣の入居者と一緒に新聞を読み、お茶を注いで回る。食後はデイルームでカラオケをする。居間に移動して入居者とおしゃべりをする。お茶の時間前には居間で3人と過ごし、その後は1人残った寝をする。夕食前には、食堂でテレビを見て過ごしている(S-25)。食堂・居間・デイルームなどの多様な場所と、お茶・おしゃべり・1人でくつろぐ・家事参加などの生活行為との多様な組み合わせが随時、自由に選択されている。N3の②は、朝のバイタルチェックを食堂で受けた後、そのまま残り、お茶の時間を他の入居者と一緒に過ごす。お茶の後ソファに移動し、テレビを見始める。その後、食堂のテーブルで昼食の調理を手

図8. 場の雰囲気の選択

図9. 動線空間における過ごし方

図10. 活動に応じた居場所の選択 (R4)

伝い、そのまま席に座りスタッフとお喋りをする。昼食後、スタッフと共に買物へ出かけ、戻ると、食堂でトランプ遊びをする。その後お茶の時間となり、そのまま食堂で過ごす。夕食前になると、他の入居者の殆どは個室に戻るが、②は食堂のソファやベンチに腰掛けて過ごし、その後台所に向い、スタッフと他の入居者が調理をしている様子を眺めている(S-26)。買物による外出以外は、殆ど居間・食堂で過ごしており、一日の様々な活動に対して、テーブルの席に座るか、ソファに移動するかといった、狭い範囲での場所の選択にとどまっている。

3-4. 起居様式と居方¹³⁾の関係

1) 居合わせ方：畳敷きの居間のあるR6に着目し、起居様式と居方の関係を考察する(図12)。床坐で新聞折りをするために、少し距離をおいて向い合う(S-27)、テレビを見ながら洗濯物を畳むため、背をむけて座る(S-28)、洗濯物を畳むため、車座になり、少し離れて座る(S-29)、寄り添うような形で車座になり、スタッフが入居者にチラシ折りを教える(S-30)、入居者同士が寄り添っておしゃべりを

する(S-31)、少し距離を置いて隣あってテレビを見る(S-32)、離れた位置に座りテレビを見る(S-33)など、多様な居方が見られる。座卓などの家具がないために、行為内容によって他者との距離や向きが異なり、また同じ行為内容であっても異なる居方が可能になっている。さらに、入居者同士の距離の取り方は、寄り添う、少し離れて座る、お互いに和室の端に座る等、様々である。床坐では、他者との距離や向き合い方、形態を自由に調整できる。一方で、椅子坐の場合(S-34・35・36)、テーブルの席では、向き合う・隣り合う・席の間をあけて座る・離れた席に座る・横の席に座るという居方であり、他者との距離や向き合い方は、置かれている椅子の数や配置によって決まる。また、ソファでは(S-37・38)、隣り合う、離れたソファやベンチに座るという居方で、入居者同士の距離は限定される。

2) 姿勢の多様性：床坐には、正座・足を伸ばし床に座る、体の後ろに手をつき足を伸ばす、片手を畳に置き足を横に崩して座る等が見られる(図13)。炬燵では、炬燵に深く入りテーブルに肘をつく、テ

図 11. 活動に応じた居場所の選択 (N3)

図 12. 居方

図 13. 姿勢の多様性

ーブルに肘をつき前のめりになる、炬燵に入りながら体を横たえる等、多様な姿勢が生まれている。また、床坐は洗濯物を畳む場合でも、正座、足を崩す、足を伸ばす(S-39)等のように、同じ作業であっても入居者個々の楽な姿勢を可能にしている。また、和室では、掘り炬燵に座って他の入居者とお喋りをする(S-40)、畳に横になってうたた寝をする、仰向けになってラジカセから流れる曲に合わせて歌を口ずさむ(S-41)、体を横たえて休む(S-42)等、同じ場所であっても、過ごし方や姿勢はそれぞれに異なり、入居者のくつろぎやすい姿勢や多様な体勢が可能となっている。一方で、椅子坐は(図13)、ソファに座って前方をじっと眺める、ソファに深く腰掛け居眠りをする、椅子に腰掛け姿勢を正す、椅子に座り机に顔を伏すなど、入居者のしぐさや姿勢は、床坐と比べると入居者毎に違いが殆どない。

4. まとめ 「生活の質」を高めるための空間的条件

「生活の質」を高めるための空間的条件を整理し、まとめとしたい。

1) 共用空間の構成：一つに集約された共用空間は、居場所の選択性を狭め入居者の様な生活を招く。反面、既往研究⁵⁾⁶⁾でも明らかであるが、性格の異なる複数の共用空間を分散配置することで、居場所の選択性が高まる。とともに、移動を触発しやすく、結果的に集団のサイズ・顔触れ・行為内容が変化し多様なものになりやすい。そのことは同時に、賑わいや静けさといった場の雰囲気や随時転換することにも繋がっており、多様な場を分散することで、入居者が各々個別の生活を組み立てることを可能にしている。

2) 空間の関係性・接続性：外部に向けて開放的につくられた個室や廊下・縁側は、眺めや日当り等の外部からの様々な刺激を受け、多様な過ごし方を生み出す。また、閉鎖的な個室の計画ではなく、建具等で廊下と個室、あるいは個室同士の開放・閉鎖が可能な場合には、個室への他者の立ち入りやすさ、他所からの音や雰囲気の伝わりやすさを調節することができ、偶発的に新たな行為が喚起される。

3) 動線空間の計画：外部や居室とのつながりの弱い廊下は、単に移動の場にとどまる。動線が外部と視覚的・空間的な繋がりをもつこと、あるいは動線上に様々な性格の異なる居場所や家具が配置されることによって、移動を喚起するとともに、移動を契機とした自主的な行為を誘発する。また、動線自体が居場所にもなり得る。移動の効率性のみを重視するのではなく、入居者の移動を喚起し、共用空間を様々な巡ることのできるよう、変化のある動線計画が求められる。

4) 多様な起居様式を可能にする計画：床坐は、椅子坐にはない、入居者のくつろいだ姿勢、過ごし方や、他者との自由な距離や向き合い方を可能にする。足腰の弱い入居者が使いやすい椅子坐と合わせて、様々な起居様式を可能にする床仕上げ・家具の設えが重要である。

入居者の自律性を触発し、「生活の質」を高めるためには、入居者個々の意思によって人(相手)やモノ(場所・しつらえ)、コト(生活行為)を選びとり、個別の生活を主体的に組み立てることが重要である。そのために、住宅固有のスケール・外部や内部同士のつながり方・オモテとウラ・多様な床仕上げ・明るさと暗さ・賑やかさと落ち着き等、性格がそれぞれに異なる場を用意することにより、入居者の様々な行為を触発する計画が必要である。

本研究では「生活の質」という視点で改修型の特性を明らかにしたが、改修型であれば必ず質の高い生活が実現できるわけではない。共用空間が一つに集約される場合や、縁側などの共用空間が少ない場合

には、居場所が限定され、様な過ごし方に繋がる。それ故に、元の住宅をそのまま残すことより、空間特性を解釈して課題の改善と利点の継承を図る改修方法が求められる。また、住宅を活かした介護方法・生活の組み立て方等も重要となる。GHを「生活の場」へと近づけるために、新築でも既存建物を活用する場合でも、改修型の空間特性を参照することは有用であるといえよう。

注釈及び参考文献

- 1) 外山は、高齢者の居住が施設か在宅かの二者択一的な構図である中で、GHは住まいであると同時に専門スタッフが24時間駐在する施設でもあるという「住宅と施設の二重性」をもち、「自宅でない在宅」の可能性をすると論じている。(外山義、「自宅でない在宅」、医学書院、2003年)
- 2) 「生活の質」に関して、現在QOL(Quality Of Life)の概念は、社会政策・医学・社会学・心理学・老年学・建築学等幅広い分野で使用されている。生活の主体である個人を取り巻く物理的環境、社会的環境や、個人の心理的なものから捉えるなど、QOLを捉える定義、指標は様々である。本研究で取り扱う「生活の質」とは、特にGHで生活を行なう入居者の生活の仕方に焦点を当てる。
- 3) 石井敏他、「グループホームにおける生活構成と空間利用の特性——痴呆性老人の環境構築に関する研究」、日本建築学会計画系論文集 第502号、pp.103-110、1997.12
- 4) 石井敏他、「先進事例にみる共用空間の構成と生活の関わり——痴呆性高齢者のためのグループホームに関する研究」、日本建築学会計画系論文集 524号、pp.109-114、1999.10
- 5) 厳爽他、「グループホームにおける空間利用の時系列変化に関する考察——「なじみ」からみた痴呆性高齢者のケア環境に関する研究(その1)」、日本建築学会計画系論文集 第523号、pp.155-161、1999.9
- 6) 鈴木健二他、「痴呆性高齢者グループホームにおける空間の構成と入居者の生活・スタッフのケアの展開——痴呆性高齢者のケア環境のあり方に関する研究(3)」、日本建築学会計画系論文集 第556号、pp.169-176、2002.6
- 7) 厳爽他、「空間と運営・介護からみた新築型および既存建物活用型痴呆性高齢者グループホームの相違に関する考察」、日本建築学会計画系論文集 第588号、pp.23-30、2005.2
- 8) 厳らは、スタッフの介護行為を炊事、掃除、ケース記録、申し送りなどの「間接介護」と、空間誘導、身体的介助、心理的サポート(声かけ・会話/見守り・寄り添い)の「直接介護」に分類し、直接介護を行いながら間接介護を行なうといった「ながら場面」に着目して、関わり方の分析を行っている。
- 9) 山田あすか他、「痴呆性高齢者グループホームにおける居住者による固有の居場所の選択とその要因」、日本建築学会計画系論文集 第556号、pp.145-152、2002.6
- 10) 2001年度に九州・山口県のGH240件に対してアンケート調査を実施した。回収した81件のうち回答不備の9件を除く72件を有効回答とした。

【アンケート回収結果】 回収率:33.80% (81/240件)

	新築型	改修型(民家)	改修型(その他)
有効回答数	52件	10件	10件
図面添付件数	37件	7件	5件

- 11) 2002年の調査では、入居者の過ごし方を中心に、2003年・2005年ではそれに加え、介護場面の観察調査を行った。図2-5には2002年、図6-13には2002～2005年の調査データを使用した。
- 12) この傾向の要因として、調査時間(481分)と、各入居者のトイレ利用や、浴室利用の時間等を考慮すると、滞在時間の上限が決まってくると考えられる。
- 13) 鈴木は、「居方」とは「人が居る場面に含まれる社会・空間的関係性を取り扱う概念」と定義している。本研究では、向き合い方、互いの距離、集う形を総じて「居方」とする。(舟橋國男編、鈴木毅他、「建築計画読本」、pp.117-137)

※本研究は2003年度日本建築学会大会学術講演会にて発表した内容を加筆修正したものである。

(2006年11月10日原稿受理、2007年5月7日採用決定)